ニ相移り、多人数之者相雇入置、原御畑地を段〻開発仕、猶又、霸見山并野田ニ地獄火勢御座候に寄明凡（磐）製法能儀存立、長崎・薩摩ニ罷越聞繕候得共、製法之義相分兼候ニ付、種〻工風仕、煮方仕心見候処ニ鍋之内に不斗多葉粉之火がら落入候而、夫ゟ出来初候而、灰汁水差加へ候儀を存付、色〻心を砕き製方出来候由申傳へ罷在候。然ル処、小浦考庄屋之家ニ、大公儀ニ日本初而之凡（磐）山と申立候を候得者、長崎表ニ而唐明凡（磐）之政策方を求候儀にも可有御座哉、乍併、同人家ニ御座候諸書物、火災ニ而焼失仕候而、申傳のミニ御座候而分明難仕奉存候。右之段、荒〻心覚之処奉申上候。以上

九月十日　　伊嶋又兵衛

なお、この記録中に明凡とあるは「明磐」の略記である

「別府が、好きに、」

市内歴史探訪に初めて参加できて

國廣清光

「お父さん、別府って、いいとこやったんじゃなあ。」

平成六年五月二二日。別府市史談会の主催する「市内歴史探訪」に家族で参加させていただいた。その帰り、少し遅めの昼のうどんを家族で食べていた時、中学三年生の娘が、こう話しかけてきた。

「どうしてや。」

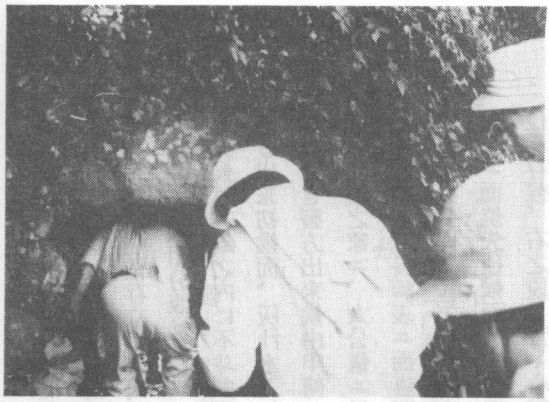
「だって、色のついたあんな大きな石の古墳もあるし、吉野ケ里遺跡と同じ時代の実相寺遺跡もあるし、いいとこじゃなかったら、あんなもん無いじゃろ。」

「そうじゃのお」

「あいちゃん、わたしたちすごいなあ、縄文や、弥生や、奈良時代の人たちと同じところで生活してるんやなあ。」

と、妻の声も弾んでいる。

「あいよい、今晩、あの鬼の岩やに泊まり行こうか。竹長先生はのお、ほら、古墳の中で照明をつけてくれたり、色がのこっちょるじゃろ、ち説明してくれた先生じゃ。先生が小学生のころは、あん中で火を焚いて遊びよったらしいぞ。お父さんも、生まれて初めて古墳の中に入った。感動したのお。今晩行こうや。」



「だめ。怖い、」

「それにしても、三島社の奇水の話は面白いのお。毎年決まっち、苗代の頃から水が湧きだし、刈り入れの頃を過ぎると水が涸れよったち言いよったのお。実相寺の下一帯の田んぼにやるほどの水がじゃ。しかも湧きでてくる水に小エビがおったとかじゃ。埋め立てたのはもったいないのお。観光バスで、そんなエピソードを、ガイドさんから聞かされると、不思議な気持ちになっち、忘れられんどのお。」

「お父さん、機会があったら、またこんな会に参加したいなあ。説明を聞いて、すごいもんって初めて分かって面白いわ。家族でいいお散歩にもなるし、お天気もよかったし、おうどんもおいしいし、」

その夜も、疣神様、ワクド石、桜ヶ丘の大石、ホルトの木、上人が浜の「上人」は、空也上人からきていること等、話が弾んだ。娘は空也上人について、早速百科事典で調べていた。

「言霊かな……。」ふと、わたしはそうつぶやいた。

昨年度4月から、研究員として県下唯一の市町村立である別府市教育センターの使命を考えて来た。そして今わたくしなりに得ている表現は、「別府に生まれてよかった、別府の教育を受けられてよかったと、子どもや保護者に感謝される別府市教育の振興に尽くす。」と、「この感覚を具体化する研修講座の核は、地域素材の教材化に

ある。」との二つである。

全国共通の教科書を、うまく教えるための研修だけでは、別府が好きになる子どもは育たない。別府のよさを具体的に実感させる授業を開発して行かなければ。

こう考えたのは、実は、わたしの次のような実感からである。

久しぶりに、故郷の国東へ帰って、ふるさとの山々や家々を眺めると、何時もほっとする。なんとも言えない落ち着いた気分に浸ってしまう。

ところが、出張で、久しぶりに別府に帰り着いても、ほうっとしない。どうも落ち着いた気分に浸れないのである。生まれ育った国東で一八年、転勤で別府に住みついて一八年、老後も別府でと家も立てたのに。

今はもう遠い思いでのみの国東、明日の仕事の事を考えざるを得ない別府、この違いはきっとある。しかし、いま一つのおおきな理由は、わたしが、別府の歴史に無知な為ではあるまいか。わたしが、別府のよさを知らぬ為ではあるまいか。

長男と次男は、東京の友達に、別府の何を、別府の誰を、誇らしげに語っているだろうか。温泉と、別府湾と奥別府の景色だけではあるまいか。友に別府のことを語りながら心中、寂しい思いをしているのではないか。別府で育った子どもたちに、「別府が好きだ、」と誇りを持って言わせたい。それには、誇れる人、誇れるもの、誇れる歴史を教材化して、子どもたちに実感させておかなければ。

この思いを実現して行く講座をと、「江戸時代の別府の特性―別府と大分の気質の違い―」について、この夏は入江先生に、お願いした。後期には、「明治前期における新政府の政策と別府の人々の暮らし」について、大野保治先生にお願いしている。

さきほどの思いをお話し申し上げながら、講師の方との折衝を進めているおりに、竹長先生から「市内歴史探訪」へのお誘いをいただいたのである。

この日の夜、妻と娘はつぎのようにも語った。「日名子さん、入江先生、竹長先生、土谷先生、お世話してくださっている人たちは、みんな素敵なお顔していらっしゃる。ボランテアってすごいなあ。」

「お父さん、あい、今日いってよかった。別府が、少し好きになったよ。」

なにげない、娘のこのひと言。

「言霊かなあ……。」

この一言を別府の子どもたち、一人ひとりに言わせたい。今日のような授業を、各教科でつくって行きたい。別府の中学生に、別府と文学の単元を、わたしは、きっとつくろう。

別府に来て一八年。ふるさと国東に帰ったときにも似た、落ち着いた気分が、今日、初めてする。これは、なにゆえだろうか。

国際情報化社会の唯中にわたしはある。新聞・テレビ・雑誌・ラジオ等から、日々夥しい情報を確かに得ている。

しかし、よくよく考えてみると、「わたくし自身の個性を具体的に示してくれる情報」「わたくしの生きかたを、励まし、意味づけ、方向づける情報」は、万人向けのマスコミ情報には、ほとんど無いのである。

同様に、マスコミから、別府市民が、別府市を、心から誇れる情報もそう流れていないのである。

このわたくしの心の空白を、今日の歴史探訪は埋めてくれたのではないか。

この日の快い疲れの中で、こんなことを心のなかでつぶやきながら、わたしは、久しぶりに、深い眠りについたのだった。

ありがとうございました。

（一九九四・一〇・一〇記）

写真は「今日新聞」提供